St. Luke's International University Repository

看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める総合実習の効果: 看護学生から臨床看護師へ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐居, 由美, 松谷, 美和子, 平林, 優子, 西野, 理英, 寺田, 麻子, 高屋, 尚子, 飯田, 正子, 桃井, 雅子, 佐藤, エキ子, 井部, 俊子, Sakyo, Yumi, Matsutani, Miwako, Hirabayashi, Yuko, Nishino, Rie, Terada, Asako, Takaya, Takako, Iida, Masako, Momoi, Masako, Sato, Ekiko, Ibe, Toshiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00015047

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

── 資　料 ──

看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める総合実習の効果
～看護学生から臨床看護師へ～

佐居由美[1)]，松谷美和子[1)]，平林優子[1)]，西野理英[2)]
寺田麻子[2)]，高屋尚子[2)]，飯田正子[2)]，桃井雅子[3)]
佐藤エキ子[2)]，井部俊子[1)]

抄　録

【目的】高度な専門医療を必要とする入院患者の割合が高くなり，在院日数が短縮され，看護師には高度な臨床看護実践能力が要求されている。だが，看護基礎教育の現場では，修得すべき内容が増大している一方で，実習時間内での修得には限界があり，実習の場での看護技術の実践経験の貧弱化に拍車がかかっている。そこで本学では，大学３年次までの看護基礎教育課程で修得した看護実践能力と臨床で求められる看護実践とのギャップを縮める実習〔総合実習（チームチャレンジ）〕を，４年次の学生の一部に導入した。チームチャレンジは，小児や老年など専門領域を探求する他の総合実習と比して，夜勤遅番実習・患者の複数受け持ちを行うことでチームの一員として機能することに特に焦点を当てた実習である。本研究では，その効果を調査し明らかにすることを目的とする。
【方法】2007年度Ａ看護系大学卒業予定者と「総合実習」臨地実習指導者を対象に，「総合実習」の内容と実習目標についての質問紙調査を実施した。
【結果】９名の学生，21名の実習指導者から回答を得た。教員と学生とも，「チームチャレンジ」履修者は，それ以外の学生に比べ，実習目標「対象の理解に基づいた看護ができる」の達成度がやや低く，実習目標「主体的にメンバーシップをとることができる」の達成度がやや高かった。「チームチャレンジ」履修の学生は，基本的看護業務の経験内容が多かった。
【考察】チームチャレンジ履修の学生は，他の実習と異なり，夜勤・遅番実習を経験することから，「主体的にメンバーシップをとることができる」という実習目標が比較的達成されやすいと思われる。だが，複数の患者を受け持つ実習を行うため，個々の患者の理解が浅くなり，「対象の理解に基づいた看護ができる」という目標達成度が低いのだと考えられる。総合実習チームチャレンジ実施にあたっては，複数受け持ち，夜勤遅番実習を実施する前段階として，必要な患者個人を理解し個別的な看護ケアを提供できる能力の確認が必須だと思われる。

キーワード：総合実習，夜勤，複数受け持ち，看護実践能力

Ⅰ．はじめに

昨今，医療技術および医学の進歩，高齢社会における医療需要の増加，医療コストの削減などを背景に，在院日数が短縮され，高度な専門医療を必要とする入院患者の割合が高くなっている。それゆえ，安全かつ高度な臨床看護実践能力がこれまで以上に必要とされる（厚生労働省看護課「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」報告書，2003）。

このような現状において，看護基礎教育の現場では，修得すべき内容が増大している一方で，実習時間内での修得には限界がある。また，患者の安全確保と人権への配慮により，免許取得前の看護学生による患者への技術適用の機会が減少する状況にあり，実習の場での看護技

受付日 2008年８月30日　受理日 2009年１月18日
１）聖路加看護大学，２）聖路加国際病院，３）聖マリア学院大学

術の実践経験の貧弱化に拍車がかかっている。さらに，臨床現場では高度なコミュニケーションスキルが求められるのに対して，現代の若者の対人関係の希薄さも問題視されており，新人看護師の育成ではこれを前提とした教育的アプローチの必要性が指摘されている（國眼，2004）。

看護基礎教育課程では，基本的な理論や知識に基づく判断力などの知力の育成を行うとともに，臨床実習において，これを適用し複雑かつ高度で多様な看護業務をチームメンバーのひとりとして遂行することができる能力の育成を行っている。看護基礎教育課程を卒業した看護学生は，それぞれの医療機関での研修を経ながら，交替勤務をも担える一人前の看護師となることを期待される。しかし，就職したばかりの新人看護師にとって，看護技術の多くはいまだ実際に適用したことがなく，各専門領域における特殊な知識や技術なども未知の技術である。これらをできるだけ短期間にマスターし，基礎的な看護業務や交替勤務に慣れ，豊かな人間関係を結び，自分なりの看護ケアができるように成長していくための資質をどのように育むかも，看護基礎教育課程では問われている。

本稿では，看護大学３年次までの看護基礎教育課程で修得した看護実践能力と臨床で求められる看護実践との乖離を縮める臨地実習〔総合実習（チームチャレンジ）〕を実施（後藤他，2007）したので，その効果を報告したい。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は，実習〔総合実習（チームチャレンジ）〕の効果を調査し明らかにすることである。

Ⅲ．研究方法

１）研究期間

2007 年８月６日～ 2009 年３月 31 日。

２）研究対象

2007 年度Ａ看護系大学授業科目「総合実習」履修学生 89 名（うち，「チームチャレンジ」履修者 15 名）。

2007 年度Ａ看護系大学授業科目「総合実習」臨地実習指導者 31 名。

３）データ収集方法

自記式質問紙により，データ収集を行った。質問紙は，研究者が作成し，研究者以外の研究員が開封しデータ入力を行った。

（１）2007 年度Ａ看護系大学授業科目「総合実習」履修学生用質問紙と内容

①総合実習後調査票（2007 年 10 ～ 11 月実施）：実習内容，実習への満足度，実習場への適応度，臨床看護師への準備度，目標達成度，卒業後の課題

②卒業後調査票（2007 年７月実施）：経験したリアリティショック内容，看護基礎教育への要望

（２）2007 年度Ａ看護系大学授業科目「総合実習」臨地実習指導者用質問紙と内容

①総合実習教員用調査票（2007 年９月実施）：「総合実習」実習目標達成度，卒業後の看護実践にあたっての課題

４）倫理的配慮

対象者には，研究の主旨や研究への参加は自由であり，質問紙の開封・データ入力は研究者が行わず，参加した個人の匿名性が保持されること，参加の有無が大学における成績評価には関係しないこと，が明記された文書を質問紙とともに配布し，調査票の提出をもって，研究への協力とした。本研究は，Ａ看護系大学研究倫理審査委員会で審議され承認を得て実施した（承認番号：07-051）。

Ⅳ．総合実習「チームチャレンジ」概要

Ａ看護系大学は，関東圏に所在し，１学年約 90 名の学部学生が在籍している。Ａ看護系大学では，実習科目群を３つのレベルに分けて段階的に実習を行っており，各段階で共通の実習レベル目標を有している。レベルⅠの実習で，学生は１人の患者を受け持ち，看護過程を展開し，主に日常生活援助に関する看護技術について学習する（２年次後期に履修）。レベルⅡでは，各領域（小児，母性，急性期・慢性期，老年，精神，地域）にて実習を行う（３年次後期に履修）。レベルⅠおよびレベルⅡでの実習およびこれまでの学習のすべてを統合して行う実習がレベルⅢの実習（科目名「総合実習」）であり，４年次前期に履修する。総合実習は，大きく９領域（チームチャレンジ，家族発達看護，地域看護，国際看護，老年看護，精神看護，急性期看護，ターミナルケア，小児看護）に分かれており，実習領域は学生の希望により決定する。本稿で報告する「チームチャレンジ」は，2006 年度に「看護教育」領域の総合実習として開始された（履修者４名）。翌年の 2007 年度には，看護管理学と基礎看護学の教員が担当者として加わり，「チームチャレンジ」と名称が変更された（履修者 15 名）。

総合実習「チームチャレンジ」は，それまでの領域別の実習を自ら統合し，新人看護師が行う看護実践に近い状況での実習を，段階を踏んで行う実習である。患者の複数受け持ち，次の勤務帯への申し送り，交替勤務〔遅番（10：30 ～ 19：00）と夜勤（15：30 ～翌朝８：30）〕，患者サマリーの作成，などが実習内容に含まれ，ヘルスケアチームの一員として役割遂行をめざした実習である。また，未経験の看護技術の見学・実施も推奨される。「チームチャレンジ」という名称は，ヘルスケアチームの一員としての役割と機能を担いつつ，夜勤や複数受け持ちなど，さまざまなことにチャレンジする実習であるという意味合いから命名されている。

Ⅴ．結果

1．「総合実習」履修学生

「総合実習後調査票」は９通提出され（回収率：10.1％），うち，４名（回収率：28.5％）が「チームチャレンジ」履修者であった。「卒業後調査票」の返送は，０通であった。

1）総合実習概要（受け持ち患者数）

総合実習における受け持ち患者総数は，チームチャレンジ以外の総合実習では１～２名，総合実習では，平均４名（３～５名）であった。また，チームチャレンジ履修者には，重症患者１名，要注意患者３名を担当した学生（F）もいた。日勤での最大受け持ち数は，チームチャレンジで，平均3.3名（３～４名）であった。また，遅番勤務・夜勤での実習を，チームチャレンジ以外で経験していた学生（E）もいた（表１）。

2）総合実習経験内容，基本的業務の獲得

総合実習における看護業務の経験内容では，チームチャレンジ履修の３名の学生（F，G，H）は，「入院時のケア」を経験していた。「退院時のケア」は，チームチャレンジ以外の学生（E）とチームチャレンジの学生（I）が経験していた。「手術直後のケア」は，チームチャレンジの学生３名（F，H，I）が経験していた。また，基

表１　総合実習概要（受け持ち患者数など）

学生No.	履修総合実習	受け持ち患者総数（名）	受け持ち患者重症度など総数（名）			日勤最大の受け持ち患者数（名）	遅番実習	実施回数	夜勤実習	実施回数
			重症	要注意	ケア自立度の低い患者					
A	チームチャレンジ以外	1	未記入	1	未記入	1	×		×	
B	チームチャレンジ以外	2	0	0	0	1	×		×	
C	チームチャレンジ以外	1	0	0	1	1	×		×	
D	チームチャレンジ以外	1	0	1	0	1	×		×	
E	チームチャレンジ以外	2	0	0	0	1	○	1	×	
平均値		1.4（1～2）	0	0.4（0～1）	0.2（0～1）	1				
F	チームチャレンジ	5	1	3	1	4	○	1	○	1
G	チームチャレンジ	3	0	0	0	3	○	1	○	1
H	チームチャレンジ	4	0	1	1	3	○	1	○	1
I	チームチャレンジ	4	未記入	未記入	4	3	○	1	○	1
平均値		4（3～5）	0.4（0～1）	1.3（0～3）	1.5（0～4）	3.3（3～4）				

○：経験，×：経験なし，斜線：該当なし

表２　総合実習経験内容

学生No.	総合実習	看護サマリー作成	入院時のケア	実施項目			退院時のケア	実施項目			手術前のケア	実施項目			手術直後のケア	実施項目			基本的業務の獲得				
				バイタルサインのチェック	ヒストリーの聴取	病棟の説明		家庭の準備状況のアセスメント	自己管理能力のアセスメント	退院指導		バイタルサインのチェック	術前指導	手術室への報告		バイタルサインのチェック	点滴管理	術後の状態の報告	報告受け	報告する	水分出納の計算	ナースコール対応	カルテから必要な情報を読み取る
A	チームチャレンジ以外	×	×				×				×				×				○	○	×	○	○
B	チームチャレンジ以外	×	×				×				×				×				×	×	×	×	○
C	チームチャレンジ以外	×	×				×				×				×				○	○	○	○	○
D	チームチャレンジ以外	○	×				×				×				×				×	○	×	×	○
E	チームチャレンジ以外	×	×				○	○	○	○	×				×				○	○	○	×	○
F	チームチャレンジ	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×				○	○	×	○	○	○	×	○	○
G	チームチャレンジ	○	○	○	×	×	×				×				×				○	○	○	○	○
H	チームチャレンジ	○	×				×				×				○	○	○	×	○	○	○	○	○
I	チームチャレンジ	○	○	○	×	×	×				○	○	○	○（見学）	○	○	○	×	○	○	○	○	○

○：経験，×：経験なし，斜線：該当なし

本的業務の獲得は，チームチャレンジ以外の学生の獲得内容は多様であった。チームチャレンジの学生は，Ｆの学生の「水分出納の計算」を除いて，獲得できていると回答していた（表２）。

３）実習満足度，実習場への適応度，臨床看護師への準備度

今回，本研究に協力してくれた学生の実習満足度は，「満足～大いに満足」であった。実習場の適応度は，チームチャレンジ以外の学生（Ｂ）が「大いに適応」，ほかの学生は「やや適応」していたと回答していた。臨床看護師への準備度は，チームチャレンジ以外の学生は，「まあまあ準備ができた」３名，「かなり準備ができた」２名であり，チームチャレンジの学生は，「準備がややできなかった」１名，「まあまあ準備ができなかった」１名，「かなり準備ができた」２名であった（表３）。

４）総合実習共通目標達成度（自己評価），卒業後の看護実践における課題

総合実習における共通目標達成度と卒業後の看護実践における課題について，表４に示す。

チームチャレンジの学生の達成度が，チームチャレンジ以外の学生より高かった目標は，「④チーム全体の動きがとらえられ，自分でチームのなかで果たす役割を認識し，主体的にメンバーシップをとることができる」（チームチャレンジ 80.0％，チームチャレンジ以外 76.0％），「⑥対象の価値観を尊重し，人としての尊厳を重んじる態度がとれる」（チームチャレンジ 97.5％，チームチャレンジ以外 85.0％），「⑧対象に誠意をもち，真摯な態度で実習に取り組むことができる」（チームチャレンジ 97.5％，チームチャレンジ以外 93.6％）であった。学生別，総合実習目標達成度の平均は，60.0 ～ 95.5％であった。

２.「総合実習」臨地実習指導者

21 通が回収された（回収率：67.7％）。内訳は，チームチャレンジ以外の担当者 15 名，チームチャレンジの担当者６名であった。

１）実習目標を達成した学生数

総合実習で教員は，平均 4.9 名（１～９名）の学生を担当していた。それぞれの総合実習指導者が担当した学生のうち，総合実習共通目標を達成した学生の数を，表５に示す。実習目標「①対象（個人・家族・集団・組織・社会）の発達プロセス，健康状態，生活の変化，文化，地域性の理解に基づいた看護ができる」の達成学生数は，チームチャレンジ以外の実習では平均 4.4 名（１～９名），チームチャレンジでは平均 4.0 名（２～５名）であった。実習目標「④チーム全体の動きがとらえられ，自分でチームのなかで果たす役割を認識し，主体的にメンバーシップをとることができる」では，チームチャレンジ以外の実習では平均 3.8 名（０～９名），チームチャレンジでは平均 4.0 名（２～５名）であった。

２）卒業後の看護実践における課題

卒業後の看護実践における課題についての記述内容を，表６に示す。各実習目標での課題が回答された。

Ⅵ. 考察

総合実習「チームチャレンジ」と「チームチャレンジ以外」の実習の実習経験内容を比較すると，「チームチャレンジ」を履修した学生は，基本的看護業務が獲得されたと回答した学生が多い。これは，未経験の看護技術の見学・実施を強く推奨している総合実習「チームチャレンジ」の成果ととらえることができよう。

一方で，臨床看護師への準備度は，学生Ｆ以外の学生が，「かなり～まあまあ準備ができた」と回答しており，「チームチャレンジ」と「チームチャレンジ以外」の総合実習では大きな差はみられなかった。「チームチャレンジ」は，新人看護師が行う看護実践に近い状況の実習であるが，ほかの総合実習においても，本研究対象者は「臨床看護師への準備ができた」と回答し，夜勤や遅番時間帯での実習が未経験であっても臨床への準備ができたと認識されており，今回の結果からは，「臨床看護師への準備度」についての「チームチャレンジ」の効果は明らかにはならなかった。

表３　実習満足度，実習場への適応度，臨床看護師への準備度

学生No.	履修総合実習	実習満足度	実習場への適応度	臨床看護師への準備度
A	チームチャレンジ以外	やや満足	やや適応	まあまあ準備ができた
B	チームチャレンジ以外	大いに満足	大いに適応	まあまあ準備ができた
C	チームチャレンジ以外	満足	やや適応	かなり準備ができた
D	チームチャレンジ以外	やや満足	やや適応	かなり準備ができた
E	チームチャレンジ以外	やや満足	やや適応	まあまあ準備ができた
F	チームチャレンジ	大いに満足	やや適応	準備がややできなかった
G	チームチャレンジ	やや満足	やや適応	まあまあ準備ができた
H	チームチャレンジ	やや満足	やや適応	かなり準備ができた
I	チームチャレンジ	大いに満足	やや適応	かなり準備ができた

各項目，５段階にて回答（例：大いに満足，やや満足，満足，やや不満，大いに不満）

表４　総合実習の共通目標達成度と実践での課題（学生）学生達成度平均

学生	実習目標	①対象（個人・家族・集団・組織・社会）の発達プロセス，健康状態，生活の変化，文化，地域性の理解に基づいた看護ができる		②情報収集，課題判別，計画立案，実施，評価の一連のプロセスを効果的に活用できる		③対象の状況をふまえ，適した方法を選択・想像して，主体的に技術を提供できる		④チーム全体の動きがとらえられ，自分でチームの中なかで果たす役割を認識し，主体的にメンバーシップをとることができる	
	履修総合実習	達成度（%）	実践での課題	達成度（%）	実践での課題	達成度（%）	実践での課題	達成度（%）	実践での課題
A	チームチャレンジ以外	90	複数の患者さんを同時に受け持つなかでも，個人個人に焦点を当て，それぞれの背景を理解しようとする姿勢を維持するよう努めなければならないだろうと思う。多勢のなかで「個」を見失ってしまう不安がある。	90		90	例えば消毒処置など，学生という立場上，実施できなかった看護技術は多いと感じる。すなわち卒業後，臨床で学ばなければならない看護技術が相当多く残っているのだろうと思う。	100	
B	チームチャレンジ以外	90	情報がないと理解できない。どう情報収集するか。対象との関係性の構築など。	95	実習では対象とならないような複雑・困難なケースに当たること。	80	その場に応じた必要な技術をもっているかどうか。	80	
C	チームチャレンジ以外	80	受け持ちが１人だったため，複数になったら達成度は下がる。	80	受け持ちが１人だったため，複数になったら達成度は下がる。	80	複数を受けもつと達成度は下がる。	90	受け入れはよく，学びとることが多かった。
D	チームチャレンジ以外	20	ご家族からの情報がなく，ご本人からも言語化された情報を得られず，過去のことからの理解は難しかったです。患者様を全人的に理解することは難しいと思います。	60	実習では先生や仲間と確認することができたので，自分の立てた計画や目標に自信をもつことができた。また，１人だと側面からのアセスメントになってしまうが，多面的にみれたと思う。今後は自分が責任をもっていくのかと思うと不安です。	60	今までは必ず教員なり看護師のチェックがあったけれど，今後自分が責任をもって技術を提供すると思うととても不安で緊張が大きい。確実な技術と知識を身につけなくてはと思う。	50	学生と看護師との役割は違うと思うので，視野を広げ，感性を磨き，チームメンバーとして役割を果たしていきたい。
E	チームチャレンジ以外	80	家庭内の環境についてはアセスメントを通して看護を実践することはできたが，地域までを包括したものができなかったので，それが課題となりそうである。	75	情報収集に時間をとることができたが，実際の勤務のなかでの収集量で，どのように看護を提供していけるか。	80	総合実習では教員に相談しつつすることができたが，現場に入ってそれに自身がもてるか不明	60	看護師の動きや，病棟内の動きが把握しきれないことがしばしばあり，チームのなかでうまく機能していくための能力が養われていないと思う。
平均値		72.0 (20 ～ 90)		80.0 (60 ～ 95)		78.0 (60 ～ 90)		76.0 (50 ～ 100)	
F	チームチャレンジ	80		90	電子カルテを効率よく活用できる方法を知りたい。	80	最初のうちは，ある程度プリセプターに頼れる状況であってほしい。	100	遅番・夜勤に積極的に入る。
G	チームチャレンジ	70	対象の理解に努めたが，それをケアに反映していくことに自信をもち実行に移していくこと。	70	評価をすることに不安が残る。	70	主体的になりきれないため，自立への不安がある。	70	全体の動きのなかでの自分の立場は最後のほう（実習の）で感じながら動けたが，主体的に動くためには，もう少し自分から病棟に入っていく必要があると思う。
H	チームチャレンジ	40	目の前の業務に追われて，全体像をとらえることが困難かもしれない。	60	正しいのか，間違っていないか，１人で悩んでしまうかもしれない。	70	責任の大きさに，不安がつのってしまうかもしれない。	60	チームのなかでの人間関係（信頼関係）を短時間でつくりあげる課題。
I	チームチャレンジ	80	文化・地域性など，対象の退院後の生活も，もっとよく考慮できるようになることが必要であると思った。	75	実施→評価→再計画→実施…の部分をもっと頑張ってできるようになりたい。	70	適した方法を自分で選択する場合，初めはそのバリエーションを増やしていく必要があると感じた。	90	チームの雰囲気や環境に慣れること。 自分の役割を早期に認識すること。
平均値		67.5 (40 ～ 80)		73.8 (60 ～ 90)		72.5 (70 ～ 80)		80.0 (60 ～ 100)	
全体平均		70.0 (20 ～ 90)		77.3 (60 ～ 95)		75.6 (60 ～ 90)		77.8 (50 ～ 100)	

学生	実習目標	⑤看護実践を通して，看護の専門性について考え，自らの看護観を深める		⑥対象の価値観を尊重し，人としての尊厳を重んじる態度がとれる		⑦看護専門職としての役割，位置づけ，責務，態度について認識し，実践できる		⑧対象に誠意をもち，真摯な態度で実習に取り組むことができる		実習目標達成度平均（%）
	履修総合実習	達成度（%）	実践での課題	達成度（%）	実践での課題	達成度（%）	実践での課題	達成度（%）	実践での課題	
A	チームチャレンジ以外	100		95	対象者の希望に沿うようにオムツに頼らない排泄への援助を，排泄パターンを捉えて行っていたが，それはおそらく私が受け持っていたのがその方，１人だけで，しかも療養病床だったからこそ実現できたと思う。これが急性期病院だったらと考えると，言い方は悪いが「管理のしやすさ」ゆえにオムツはつけっぱなしになってしまうのではないだろうか。急性期病院では特に対象者の生活リズムに合わせたり，本人の希望に沿うケアを提供するのは難しいと思う。	100		100		95.6
B	チームチャレンジ以外	90		100	周囲が対象を尊重しない場合に，それに流されてしまう可能性がある。	90	他の職種との協働がうまくいかず，十分に専門性を発揮できない可能性がある。	98	日々のルーチン業務に追われ，一人ひとりの対象と向き合えない可能性がある。	90.4
C	チームチャレンジ以外	80	業務が緊迫化すると，こうした点について考えられなくなりそうと実感する。	80	受け持ちが１人だったため，時間をかけて接することができたが複数は自信がない。	80	業務が緊迫化，複数の対象者，優先順位。	100	実習生を受け入れてくださる対象者は，その時点でわれわれに好意的だが，看護師になったら拒否的な対象者とも関わらざるをえなくなる。	83.8
D	チームチャレンジ以外	70	現場の忙しいなかでも，忙しいさを理由にするのではなく，自分でしっかり日々の振り返りやとらえ直しをしていきたい。	75	患者さんをわかったつもりにならないように頑張っていきたい。	65	看護師として現場に入れば今までより自分の役割が明確になると思う。同時に責任も増すので，プレッシャーにするのではなく，よい緊張感のなか，勤務できればと思う。	80	引き続き実践していきたい。	60.0
E	チームチャレンジ以外	75	特になし。	75	病棟スタッフの反応（Pt の要望に対して）が，あまりよいものではなかったように感じたので，自分がその立場になったとき，どう対応すべきか悩む気がする。		医師や准看護師さんとの連携は見れたが，それ以外の薬剤部 etc との連携をみることができず，わからないままとなってしまった。	90	個別的関わりなので，その都度課題が変わると思います。	66.9
平均値		83.0 (70～100)		85.0 (75～100)		83.8 (65～100)		93.6 (80～100)		
F	チームチャレンジ	100	自分で体得していくものだと思う。	100		70	行政的な面からも看護師の役割を知ることのできる機会がほしい。	100		90.0
G	チームチャレンジ	60	大いに考える機会にはなっていた（実習が）が，自分の看護を大きくとらえるまでに至っていないため，経験をもっとしていく必要があると感じる。	100	対象を尊重する努力をしてきたが，必要な看護介入をすることに抵抗を感じることもあり，行動していくことに課題がある。	90	何の情報の共有をきちんと責任もって得ていくのか，１人の看護師として求められる役割に対して至っていないと感じることで不安があり，経験していく中で学ぶ必要性を感じる。	100	ケア度が低いからといって，そのＰｔの所に足を運ぶ日数が減ってしまうことに対し，自分なりにくやしさが残るため，きちんと考えてケアして行きたい。	78.8
H	チームチャレンジ	70	より深まることを期待する。	90	時間や業務に追われて，軽んじてしまうかもしれない。	90	自分に自信がもてるまで，周りのことが客観的にみえるまでは，認識できないかもしれない。	90	大きな課題なく，実践できると思う。	71.3
I	チームチャレンジ	70		100		80		100		83.1
平均値		75.0 (60～100)		97.5 (90～100)		82.5 (70～90)		97.5 (90～100)		
全体平均		79.5 (60～100)		90.6 (75～100)		83.2 (65～100)		95.4 (80～100)		

表５　実習目標達成学生数

担当総合実習		全体（n=21）	チームチャレンジ以外（n=15）	チームチャレンジ（n=6）
総合実習担当学生数　平均（最小～最大）		4.9（1 ～ 9）	4.9（1 ～ 9）	4.8（3 ～ 7）
総合実習の共通目標別達成した学生の数／担当学生内での割合	①対象（個人･家族･集団･組織･社会）の発達プロセス，健康状態，生活の変化，文化，地域性の理解に基づいた看護ができる	4.3（1 ～ 9）	4.4（1 ～ 9）	4.0（2 ～ 5）
		87.2（60 ～ 100）	88.2（60 ～ 100）	84.3（66.7 ～ 100）
	②情報収集，課題判別，計画立案，実施，評価の一連のプロセスを効果的に活用できる	4.2（1 ～ 9）	4.2（1 ～ 9）	4.3（2 ～ 6）
		87.6（33.3 ～ 100）	86.8（33.3 ～ 100）	89.7（66.7 ～ 100）
	③対象の状況をふまえ，適した方法を自分で選択・想像して，主体的に技術を提供できる	4.1（1 ～ 9）	4.1（1 ～ 9）	4.2（2 ～ 5）
		85.7（33.3 ～ 100）	84.3（33.3 ～ 100）	86.9（66.7 ～ 100）
	④チーム全体の動きがとらえられ，自分でチームのなかで果たす役割を認識し，主体的にメンバーシップをとることができる	3.9（0 ～ 9）	3.8（0 ～ 9）	4.0（2 ～ 5）
		79.4（0 ～ 100）	78.6（0 ～ 100）	81.3（66.7 ～ 100）
	⑤看護実践を通して，看護の専門性について考え，自らの看護観を深める	4.1（0 ～ 9）	4.1（0 ～ 9）	4.0（0 ～ 7）
		81.7（0 ～ 100）	83.2（40 ～ 100）	77.8（0 ～ 100）
	⑥対象の価値観を尊重し，人としての尊厳を重んじる態度がとれる	4.8（1 ～ 9）	4.7（1 ～ 9）	4.8（3 ～ 7）
		98.4（66.7 ～ 100）	87.8（66.7 ～ 100）	100
	⑦看護専門職としての役割，位置づけ，責務，態度について認識し，実践できる	4.7（1 ～ 9）	4.7（1 ～ 9）	4.8（3 ～ 7）
		97.2（66.7 ～ 100）	96.1（66.7 ～ 100）	100
	⑧対象に誠意をもち，真摯な態度で実習に取り組むことができる	4.8（1 ～ 9）	4.7（1 ～ 9）	4.8（3 ～ 7）
		98.4（66.7 ～ 100）	97.8（66.7 ～ 100）	100

表６　実習目標における卒後実践を行う学生にとっての課題（教員）

チームチャレンジ
実習目標①対象(個人・家族・集団・組織・社会)の発達プロセス, 健康状態, 生活の変化, 文化, 地域性の理解に基づいた看護ができる
・１人の人として上記目標の属性が統合された人として理解するということが課題。それぞれの属性ごとの理解にもとづく看護はできる（３年次実習）という域に今回の実習でやっと到達できた。 ・文化，地域性の理解というところまで考えられるには，そのような広い視点を伝えていく必要がある。 ・文化や地域性まで配慮するのは，複数受け持ちのなかでは難しい。また，経験により得られる理解もあり学生や新人が十分に行うのは困難。
実習目標②情報収集，課題判別，計画立案，実施，評価の一連のプロセスを効果的に活用できる
・①の目標達成が不十分なことに加え，病態が属性として加えられるのだが，目標①同様，単一の属性ごとのプロセス展開の域を出ることができない。 ・その日の行動計画が，看護過程に基づいていることを常に学生へ伝えることで最終的にできてきていたので，その指導は必要。 ・記録ばかりに頼らない。 ・短時間で複数の患者に対し効果的に活用するには，卒業後すぐであれば教科書的な知識のみで考えざるを得ず，アドバイザーが必要であり，アドバイスを受けながら実践し活用方法を身につけていく必要がある。 ・情報収集をチャートからのみに頼ることなく，実際の患者さんをみたり，申し送りなどから必要な情報を早く得られるようにすることが課題。
実習目標③対象の状況をふまえ，適した方法を自分で選択・想像して，主体的に技術を提供できる
・上記①，②のことに加え，自己を主体的・創造的に示すことは統合されたプロセスに示すには根拠が乏しく困難。 ・適した方法を選択・想像するには，いくつかの方法があることを知っていなくてはならないのである程度の経験のつみかさねが必要。 ・自分で選択することが可能であるという認識が新人ナースにも他のナースにもなくてはならず，それらが課題である。 ・たくさんの場面を経験し，同じような状況をむかえたときに応用化できる柔軟性をもつこと。
実習目標④チーム全体の動きがとらえられ, 自分でチームのなかで果たす役割を認識し, 主体的にメンバーシップをとることができる
・人(看護師)との関わりをとることも実習のひとつの目標であるが, 人間関係を職(実践)の場でとるには, 信頼を得ることが重要で, それには学習態度 (復習するとか）も関わるので難しい。また，自己の看護プロセスを十分に展開できないため，とてもまわりに目をやる余裕が生まれない。 ・夜勤や遅番を行うことによって，チームの一員としての認識ができ，看護師の勤務状態を知りその役割を考えることができた。 ・主体的にメンバーシップをとるには，ある一定期間チームに加わってからではないとできないことであり，実習でできても，また新たなチームに加わればすぐにはできないであろう。しかし, 実習での成功体験 (主体的にメンバーシップをとることができた) はプラスに作用すると考える。また，周囲の働きかけに大きく影響されることでもあると考える。
実習目標⑤看護実践を通して，看護の専門性について考え，自らの看護観を深める
・日々の患者のケアを考えることに一生懸命になっている分，実習中には看護観までは考えられない。振り返りのなかで，考えられるよう導いていく必要あり。 ・看護観を「自らが理想とする看護」と考えるならば，それらは複数のよい実践者に出会うことが課題。また，よい看護実践に気づくには日々の生活で感性をみがくことも大切でそれらの時間をもつことも課題。看護実践に没頭してこそ得られる気づきもあり，看護観を培うということにおいて何が有効であるかは決めにくく，よって，課題も何とは決めにくい。
実習目標⑥対象の価値観を尊重し，人としての尊厳を重んじる態度がとれる
・4 年生なので，対象への接し方は身についていた。 ・短い時間でしか患者に関わることができなかったり，次の授業がせまっているなかでも価値観や尊厳を重んじる態度を失われないのは難しい。 ・患者さんを知ろうとする気持ちを忘れないこと。

（つづき）

実習目標⑦看護専門職としての役割，位置つけ，責務，態度について認識し，実践できる

・チームの一員として入ることで，色々な看護師との関わり，学べていたと思う。
・日々の業務に追われるなかでは，これらについて意識をもちつづけるのは難しいと思われる。

実習目標⑧対象に誠意をもち，真摯な態度で実習に取り組むことができる

・言葉遣いや服装は悪いモデルがいるとすぐ悪いほうへ流れてしまう傾向があるので，適宜マナー研修は必要。
・短い時間でしか患者に関わることができなかったり，次の授業がせまっているなかでも誠意や真摯な態度を忘れずにいることは難しい。
・自分のできることとできないことを明確にして，無理をしないこと。

チームチャレンジ以外

実習目標①対象（個人・家族・集団・組織・社会）の発達プロセス，健康状態，生活の変化，文化，地域性の理解に基づいた看護ができる

・対象に合わせたコミュニケーション技術は訓練も含めてかなり経験が必要。
・急性期の病院では地域性など．を考慮したケアに発展させる時間がない場合もあり，家族との関わりを指導的・教育的に行うのは課題。
・今後は，自らの価値観に基づいた考えが患者や家族，看護師同士，コメディカル，医師との関係性において，自分の考えだけが正解ではないことを学んでいくこと。
・個々の背景（特に社会的背景や時間的な流れのなかに人があること）をもっと認識して理解することが課題。

実習目標②情報収集，課題判別，計画立案，実施，評価の一連のプロセスを効果的に活用できる

・アセスメントの方向性を考えると，まだ1人だけで考えていくのは難しい。
・同時に複数の患者に対して上記プロセス（修正まで）を活用することが求められること。
・多くの患者を受け持つ場合には課題がある（実践の場で）。
・学生個人の能力差がみられる。特に情報収集から課題を判別し優先順位をつけるまでは4年生であっても指導が必要であった。
・短時間で有効な情報をとれる準備状態，有効な情報から最重要なアセスメントができる力。
・評価をどのように行うかが理解の浅いところがある。日々の評価はできるが，一定期間の看護を総括して評価することに課題がある。
・現在起こっている問題に対してはまずまずできていたが，これから起きるかもしれないこと，今後のことを予測した看護を行うためには，経験をつむことも必要。

実習目標③対象の状況をふまえ，適した方法を自分で選択・想像して，主体的に技術を提供できる

・自分だけでは難しいと感じたときに，適切に他者にヘルプを出せることが必要。
・実習場所によって提供する技術が限られている場合，実施する機会が少なく，この目標の達成度には差がある。
・対象の特性や個別性にあわせて，望ましい技術を提供するには経験をつんでいく必要がある（総合実習では教員や指導者の助言を受けながら達成）。
・1名の患者に対するケアとしては十分。複数の受け持ちのケアとなると優先順位，時間配分に課題がある。
・自分なりの判断はできていたが，適切さ，正確さに関しては今後の課題。

実習目標④チーム全体の動きがとらえられ，自分でチームのなかで果たす役割を認識し，主体的にメンバーシップをとることができる

・自分の役割を認識できても，それをチームメンバーと共有し，チームメンバーに自ら働きかけることは，実習では難しく卒後の課題。
・実践においては，チームの動きをとらえるには経験も必要な部分があるので，それについては今後の課題。
・チームメンバーが医療職だけでなく福祉職なども含むため，そのなかでの役割やメンバーシップの能力は必ず求められる・技術レベルとしても求められる。
・現状では発言の機会を与えられるといったわずかなきっかけが必要。
・先輩の指示を聞いて動く→自ら動く，周囲（医師，コメディカル．家族など）と協力する。自らリーダーシップをとる。実習で達成できたのは，「自ら動く」まで。今後もその先をみることが必要。
・自己の能力を把握でき，援助を求めるべきことを明確にできること。

実習目標⑤看護実践を通して，看護の専門性について考え，自らの看護観を深める

・個々の看護師のもつ看護観の多様性を知り，それらを自分のなかで消化して自分なりの看護観を深める姿勢が必要（ただ受け入れるだけでなく）。
・他者に引きずられすぎたり，頑になったり，柔軟な対応が可能になるまで迷いにつきあえるか。
・専門性について考えることはできていたと思うが，看護観を深めるまでに至ったかどうか不明。22歳（看護師のたまご）なりの看護観はもつことはできた。また，看護観は「看護実践を通じて」のみつちかわれるものではなく，さまざまな人生経験をつむことが必要。これは時間をかけてつちかわれるものであると思う。
・多様な患者さんと出会うことによって深められる。

実習目標⑥対象の価値観を尊重し，人としての尊厳を重んじる態度がとれる

・できてはいたが，逆に臨床看護師となり，多忙となったときに忘れずにいられるか不安であるという声があった（自らの業務を優先することで一生懸命で周りがみえなくなる）。
・自分が中心でないことを自覚できること。
・これは特に卒後，ケアを行う際に重要な点である。

実習目標⑦看護専門職としての役割，位置つけ，責務，態度について認識し，実践できる

・欠席，遅刻による他スタッフ・患者様への影響についてきちんと考え，適した行動を取れることが必要。
・チームメンバーのなかでの看護専門職として認識していないと多職種のなかでのチームケアは行えないため，ケアの現場が多様なため，それぞれの場所での認識が求められる。
・病棟という空間のなかで，患者，医師，コメディカルとの関係はある程度理解・認識することができたと思うがもっと広い社会的な視野で考えると，卒後の課題。

実習目標⑧対象に誠意をもち，真摯な態度で実習に取り組むことができる

・できてはいたが，逆に臨床看護師となり，多忙となったときに忘れずにいられるか不安であるという声があった。
・病棟という空間のなかで，患者，意思，コメディカルとの関係はある程度理解・認識することができたと思うがもっと広い社会的な視野で考えると，卒後の課題。
・「実習に取り組む」という点ではできているとしても，実践のなかで“尊重する”とはどのようなことかがきちんと考えられること。

臨床看護師への準備が「ややできなかった」と回答した学生F（チームチャレンジ）は，実習には「大いに満足」し，実習場にも「やや適応」し，実習目標達成度も平均90.9％と高い。学生Fは，“看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める”総合実習「チームチャレンジ」に満足し，実習目標もほぼ達成できたが，臨床看護師への準備が「ややできなかった」と感じており，このことは，総合実習「チームチャレンジ」の目的設定とその内容の意味についての学生へのオリエンテーション方法，実習終了後の学生との学びの確認などに検討の余地があることを示唆していると考えられる。

実習目標度については，教員と学生とも「チームチャレンジ」履修者は，それ以外の学生に比べ，全体的に大きな差は認められなかった。だが，チームの一員として役割を果たすことに関連した実習目標「④チーム全体の動きがとらえられ，自分でチームのなかで果たす役割を認識し，主体的にメンバーシップをとることができる」は，学生の達成度がやや高いという成果が確認された。一方で，個別的な看護ケアの展開・実践に関する実習目標「①対象（個人・家族・集団・組織・社会）の発達プロセス，健康状態，生活の変化，文化，地域性の理解に基づいた看護ができる」「②情報収集，課題判別，計画立案，実施，評価の一連のプロセスを効果的に活用できる」「③対象の状況をふまえ，適した方法を選択・想像して，主体的に技術を提供できる」については，学生の達成度はやや低い。チームチャレンジ履修の学生は，ほかの総合実習と異なり，夜勤・遅番実習を経験することから「主体的にメンバーシップをとることができる」実習目標が比較的達成されやすいと思われるが，複数の患者を受け持つ実習を行うため，個々の患者の理解・実践が浅くなる傾向があり，個別的な看護の展開・実践についての目標達成度が比較的低いのではないだろうか。総合実習「チームチャレンジ」では，複数受け持ち，夜勤・遅番実習を実施する前段階として，学生は患者個人を理解し個別的な看護ケアを提供できる能力を有していることが必要条件であるが，今回の結果から，その重要性が確認された。

今後は，教員・学生から示された「看護実践における課題」など今回得られた結果を参考に，臨床現場との連携のもと，総合実習「チームチャレンジ」が，“看護基礎教育と看護実践との乖離を縮める”効果的な実習となるよう，実習内容の洗練が求められる。また，「チームチャレンジ」を経験した学生の卒業後の臨床への適応状況からも，実習の効果を検証していく必要があるであろう。

Ⅶ. 結論

本研究では，看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める総合実習「チームチャレンジ」の効果を明らかにするため，総合実習履修者と実習指導教員に質問紙調査を行った。その結果，教員と学生とも，「チームチャレンジ」履修者は，それ以外の学生に比べ，実習目標「①対象（個人・家族・集団・組織・社会）の発達プロセス，健康状態，生活の変化，文化，地域性の理解に基づいた看護ができる」の達成度がやや低く，実習目標「④チーム全体の動きがとらえられ，自分でチームのなかで果たす役割を認識し，主体的にメンバーシップをとることができる」の達成度がやや高かったが，全体的に大きな差はみられず，本調査の結果から総合実習「チームチャレンジ」の効果は明らかにはならなかった。学生の質問紙回答者が少ないことが，本結果に影響している可能性は否定できないが，総合実習「チームチャレンジ」の成果の検証にあたっては，効果を測定する尺度の開発，卒業後看護師として臨床現場での適応度の縦断的調査などについての検討が，今後の課題であろう。

謝　辞

お忙しいところ，本研究にご協力くださった皆様に心より感謝申し上げます。

なお，本研究は聖路加看護大学「実習のあり方検討会」が文部科学省の助成［平成19年度　大学教育高度化推進特別経費（教育・学習方法等改善支援経費）］を受けて行った活動の一部である。

引用文献

厚生労働省看護課（2003）．*「看護基礎教育に置ける技術教育のあり方に関する検討会」報告書*.

後藤桂子，松谷美和子（2007）．新人看護師の看護実践を段階的に進める「総合実習」．*看護展望*，32（7），31-38.

國眼眞理子（2004）．辞めない，キレない，壊れないタフな新人・スタッフの育て方教えます：いまどきの若者気質の理解から攻略する新人・スタッフの育成．ナースマネジャー，6（1），5-9.

英文抄録

Results of Integrated Training to Narrow The Gap Between Basic Nursing Education and Nursing Practice — From Nursing Students to Clinical Nurses —

Yumi Sakyo, Miwako Matsutani, Yuko Hirabayashi, Toshiko Ibe
(St. Luke's College of Nursing)
Rie Nishino, Asako Terada, Takako Takaya, Masako Iida, Ekiko Sato
(St. Luke's International Hospital)
Masako Momoi
(St. Mary's College)

Aim：The rising number of hospitalized patients requiring advanced specialized medical treatment, combined with a shortening admittance period, requires nurses to have increasingly advanced practical clinical skills. Current facilities for basic nursing education, however, are actually increasing the content required for study, placing limits on the time available for students' practical training；locations offering practical training, in contrast, have increasingly limited opportunities for nursing students to experience practical training in nursing techniques. At this college we have introduced an integrated training course known as Team Challenge aimed at certain fourth year students and which aims to narrow the gap between the practical nursing capability acquired by students through three years of nursing education courses and the practical nursing skills required for clinical nursing (the Team Challenge course requires students to handle several patients, and in addition to practical training during regular working hours, also involves working night shifts and late working hours). In this study we examine the results from this course and shed light on the study's findings.

Methods：A questionnaire survey was distributed to students expected to graduate in 2007 from X nursing college and to nursing instructors from the college's Team Challenge integrated training course on the content of the course and goal attainment.

Results：Completed questionnaires were returned by 9 students and 21 instructors. Both students and faculty who had taken the Team Challenge course had a slightly lower degree of attainment compared to other students to the subject of "Providing nursing care through understanding the patient," while having a slightly higher degree of attainment in terms of "Being able to take membership independently." Students who had completed the Team Challenge course tended to have had an overall broader experience of actual basic nursing practice.

Discussion：Students who had taken the Team Challenge course differed from other students in having experience of nursing practice during night shifts and late working hours, contributing to a comparatively easier ability to achieve the goal attainment of "Being able to take membership independently." Despite this, the course's requirement to perform practical training while remaining responsible for multiple patients resulted in a shallower understanding of the needs of individual patients, which led to a slightly lower degree of attainment compared to other students to the subject of "Providing nursing care through understanding the patient." In implementing the Team Challenge integrated training course, one of the prerequisites to having students be responsible for multiple patients while working late at night, is ensuring that they fully understand each patient's problems and confirming their ability to provide appropriate individual nursing care.

Keywords：integrated training course, night shifts, handling several patients, practical clinical skills